

いきった感じ。

花は見ずに春の子どもは駆け上がる小さな島の小さな坂を
倉石理恵

横須賀沖の猿島をうたう一連中の作。この一首、島の名はもちろん花の名も固有名詞をさけて抽象化しているので、「春の子ども」が、一首中で、淡いタッチで描いた絵のようなさざらつとした味わいに描けている。

しーちゃんを送る青空朝露にきらきら光る三色すみれ
森屋めぐみ

可愛がっていた猫の死をうたった作のようだが、作風はあくまでもあかるく、朝、出かけてゆく幼稚園児を送り出すような明るい一首に仕上がっている。そのギャップが、一般的なベットの死をうたった作とはちがう味わいをもたらしている。

対岸の闇に桜の潜みぬる贅に白湯を甘しとふむ
小川祐子

見えている桜よりも、闇に隠れて見えない桜を見る方がより贅沢だ、という気分。お茶や珈琲ではなく白湯が甘いと感ずる心。気取っていると見る見方もあろうが、これはこれで立派な価値観という見方もあろう。私としては、上句よく、とくに「対岸」「潜む」に感心するが、下句はやはり言い過ぎか、と見る。

花片が無骨に並ぶ鎮頭を侵し華やぐ桜宮橋
佐藤博之

「鎮頭」はたぶん「リベット」と読むのだろう。「侵し」

は「おかし」か。むき出しのリベットの上に、飛んできた桜の花びらが引つかかったイメージだろう。取り合わせの工夫に注目。

感動にひたるしばらく無人なる竹山家を後にし市中へ急ぐ
晋樹隆彦

今月の八首は、長崎県時津町に竹山広宅を訪ぬる一連。空港から時津町へ、しばらく探して尋ね当てる。そしてこの作。ちなみに晋樹隆彦は一九七六年（昭和五一）に早く竹山広論「原爆短歌の発見」を書いている。一番早い竹山広論である。歌集もない頃のことであった。

「三十を壮、七十を老」の双幅に阿部正教の筆の壮らし
鳥山順子

福山城を観覧した折の作らしい。阿部正教は明治維新直前に他界した備後の国・福山藩阿部家の藩主。この人物は、調べてみると弱冠二十一歳で死んでいる。人生の全体を言う言葉を、まだ若くして記した書に心を動かされた一首と読む。

じつは、私が大学時代まで住んでいた文京区西片町十番地は、この阿部家の中屋敷のあった土地である。なんとなく懐かしい思いで読んだ。

斜面には初夏の光がさしこみぬ三本の杉切り倒され
田中拓也

何十年も日影となっていたところに日光が射すドラマティックな瞬間をうたう。山の木を伐採する作業の体験に取材した作。